

郷土文化財紹介

埋蔵文化財シリーズ

＜柁の湖遺跡＞

柁の湖遺跡は地元の考古学研究者原寛氏及び当時名古屋大学考古学教室助手紅村弘氏等により1956年より発掘調査が行われました。試掘地点を定め掘り進め、上より黒土層、灰褐色土層、黄褐色土層、黄土層と地層を確認し、上層の灰褐色土層から柁の湖Ⅱ期、より古い下層の黄褐色土層から柁の湖Ⅰ期と名付けられる時期の遺物を発見することができました。このことにより柁の湖遺跡は、縄文草創期の遺跡として全国的に知られるようになります。



↑当時の発掘風景 中央が紅村先生

＜坂下に初めて住みついた柁の湖人＞

紀元前11000年頃(13000年前)日本列島は急激な温度変化に見舞われますが、柁の湖周辺は2～3か所の小さい沼があり南北より小川が流れ込みコイやフナなどの魚が泳ぎ、水辺には野ネズミや野うさぎ等の小動物、またキツネ、タヌキ、熊等の動物が生息し、森にはドングリ、クルミ等の木の実が豊富にあったと思われます。出土した石器などから推測すると、そこへ

→ 何度か補修をし使用した有舌尖頭器 東北地方で見られる



温暖な土地を探して東北地方より人々がたどり着いたと思われます。

この柁の湖人は木の実を保管したり、水を汲んだとされる薄手の土器、爪型文土器(柁の湖Ⅰ式)を使用していました。



← 爪形文土器 (縄文草創期)

鳥を採ったり魚を突くための石鏃(矢じり)、動物を狩るための石槍、料理に使う石器など移動の途中に物々交換で手に入れた黒曜石、地元の水晶、チャート、トパーズや下呂石などの石材を使い作成した石器が出土しています。



← 各種尖頭器

→ 曽根型石核
・ 石刃



← 削器 搔器 →



＜坂下で初めて火を使用した柁の湖人＞

爪型文の土器を使用した最初の人々が何処かへ移動して、2000年程経った頃、長い旅を終えて沼のほとりに住み着いた集団がありました。前の人々より進んだ技術を持ち、木曽地方で産出された砂岩の砥石を使い、磨製石斧や部分磨製石鏃また首飾りなどを作る技術をもっていました。砥石は石のほか木を磨いたり、動物の骨（骨角器）の作成にも使われたものと思われま



← 有溝砥石

→ 平板砥石



← 磨製石斧

出土した表裏縄文土器（柁の湖Ⅱ式）は薄手の土器で、形を整えるために裏と表に縄を転がし縄文文様を付けたもので、後に年代測定法『炭素14』で紀元前9775年±50年と鑑定されました。石器につい

ては、石鏃、石槍、磨製石斧、有溝砥石、平板砥石、円型搔器(ナイフ)、横型搔器等が出土しました。石材については、遠くは東北、北陸、長野県、地元の石材も利用されていました。



← 表裏縄文土器 表



← 表裏縄文土器 裏



↑ 円刃搔器

↓ 削器・搔器



小学生が表採した俗稱「ぶたの鼻」装身具 ←

＜豊富な石鏃類＞

椈の湖遺跡には一万点ほどの石鏃類が出土しました。好事家らに表採され各地へ移動したものが沢山あると聞いています。特徴的なⅠ式の長脚石鏃、Ⅱ式の部分磨製石鏃などを紹介します。



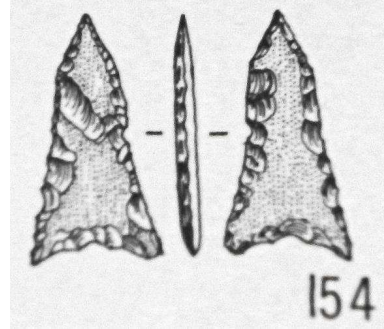
↑ Ⅰ式長脚石鏃 形がよく整えられている



片足が折れた長脚石鏃が多く採集されている。その占める割合からは意図的な破壊の可能性も疑われる。



← Ⅱ式
部分磨製石鏃



上の写真右側の石鏃
絵図で部分的に磨か
れている部分をしめし
たもの。←



↑ 表採された石鏃類